

【復活のトロパリ 第4調】

しゅのおんなでし子はふくかつのはかるおと  
づれをてんしよりききうけて、  
原そよりのていざいをふるいすて、 しと  
にほこりていえり、 し死はほろぼされ  
れ、 ハリストスかみはふくかつして、 せかいに  
おおいなるあわれみをたまえり。

【列祖のトロパリ 第2調】

ハリストスかみよ、 なんぢはれっそをしんによりてぎ  
義なるものとなし、 かれらをも以ってしょ  
諸者 みんよりきょうかいをへいていしたまえり。  
民教會聘定給 せいなるものはこうえいにありていわ  
聖者 光榮在祝 う、 けだしそなたねよりしゆくふくせられた  
蓋其種祝福

るみはいでたり、これたねなくなんぢ  
果出是種爾

をうみしものなり。かれらのきとう  
生者彼等祈祷

によりてわれらをすくいたまえ。  
由我等救給え。

【列祖のコンダク 第6調】

こうえいはちちとことせいしんにき歸す、  
光榮父子聖神歸す、

いまもいつもよよにアミン。  
今何時世世にアミン。

みえにふくたるもののはてのしるしたるかたち  
三重福者手記

をうやまわすして、しるされぬしんせいに  
敬記神性

ようごせられて、ひのげきじょうにえいを  
擁護火劇場榮

えたり。かれらはたえがたきほのお  
獲彼等堪難焰

のうちに立ちて、かみをよべり、ああかん  
中神呼り、あかん

ゆうのしゅよ、いそげ、じれんなるによ  
宥主急慈憐因

りてすみやかにわれらをたすけたまえ、  
速我等助給  
なんちはほっするところよくせざるなし。  
爾欲所能

司祭) ( 黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

ひとなんちぞうしようよつくりなんちもろもろたまものもつこれかざ  
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾

ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいため  
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に

つうかいたわれらいやふとうなんちしょぼくこときおいなんち  
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

せいさいだんこうえいまえたなんちとうぜんふくはいさんえいたてまつた  
聖なる祭壇の光榮の前に立て、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる

ものしゅさいなんちみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんち  
者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の

じんじもつわれらのぞわれらおよじゅうじゅうつみゆるわたましい  
仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈

からだせいわれらしうがいぜんこうもつなんちつとえたませい  
と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖

なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、

アミン。

### 【 聖三祝文 】

せいなる神み、せいなるゆうき、せいなる  
聖神、聖勇、聖毅、聖  
じょうせいのものよ、われら等をあわれめ  
常生者

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われら等をあわれ  
 常 生 者 我 等 懐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われら等をあわれ  
 常 生 者 我 等 懐

れめよ。こうえいはち父ちとことせいしん  
 光 荣 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのものよ、われら等をあわれ  
 聖 常 生 者 我 等 懐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われら等を  
 毅 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。

懐

司祭) ( 黙誦: しゅなよきものあがほざものなんぢ そのくに  
 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえいほうざありつねあがほいまいつよよの光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン  
 提綱 諸祖の歌 第4調 】

司祭) つしきじん みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢ しん 爾 の神にも、

司祭) えいち 睿智、

誦經) プロキメン、しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう なんぢ な よよ さんびさんえい  
主我先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世世に讃美讃榮せら

る、

しゅわ がせんぞ のかみよ なんぢ はさんよ うせら  
主我先祖の神よ 尔は讃揚せら  
れ、なんぢのなはよよにさんびさんえいせら  
爾の名は世世讃美讃榮  
る。

誦經) けだしなんぢ およ われら おこな こと おい ぎ  
蓋爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり。

しゅわ がせんぞ のかみよ なんぢ はさんよ うせら  
主我先祖の神よ 尔は讃揚せら  
れ、なんぢのなはよよにさんびさんえいせら  
爾の名は世世讃美讃榮  
る。

誦經) しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう  
主我先祖の神よ、爾は讃揚せられ、

なんぢのなはよよにさんびさんえいせらる。  
爾の名は世世讃美讃榮

【アポストロス  
使徒經 257 端 コロサイ書3章4~11節】

司祭) えいち 睿智、

誦經) せいしと じん たつ しょ よみ  
聖使徒パヴェルがコロサイ人に達する書の讀、

司祭) つつし きくべし、

誦經) けいてい なんぢら いのち あらわ とき なんぢら かれ とも こうえい うち あらわ  
兄弟よ、爾 等の生命たるハリストスの 現 れん時、爾 等も彼と偕に光榮の中に現  
れん。故に爾 等の地に在る肢體を殺せ、即 淫行、汚穢、邪侈、惡慾、及び貪婪、  
すなわちはいぐうぞうこれ これら ため かみ いかり さからい こ のぞ なんぢら さき かれら  
即 拜偶像是なり、此等の爲に神の怒は悖逆の子に臨む。爾 等も囊に、彼等の  
うち お とき これ おこな いま なんぢら いかり いきどおり うらみ そしり なんぢら くち  
中に居りし時、之を行えり。今は爾 等も忿怒、恚憾、怨恨、謗讟、爾 等の口より  
いだは ことば いつさいこれ さ たがい いつわり い なか けだしなんぢらふる ひと そのおこない  
出す愧づべき言、一切之を去れ、互に謗を言う勿れ、蓋爾 等舊き人と其行  
ぬ あらた ひと すなわちかれ つく もの かたち したが ちしき あらた もの き  
とを脱ぎて、新なる人、即 彼を造りし者の像に循いて知識の改めらるる者を衣  
たり。此にはエルリン人及びイウデヤ人、割禮及び無割禮、夷狄及びスキト、奴隸  
およ じしゅ もの すなわち いつさい およ いつさい うち あ  
及び自主の者なし、即 ハリストスは一切なり、及び一切の中に在り。

\*\*\*\*\*  
(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう。だから、地上の肢体、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪欲、また貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのために、神の怒りが下るのである。あなたがたも、以前これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩いていた。しかし今は、これらいっさいのことを捨て、怒り、憤り、惡意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を、捨ててしまいなさい。互にうそを言ってはならない。あなたがたは、古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て、造り主のかたちに従って新しくされ、眞の知識に至る新しき人を着たのである。そこには、もはやギリシャ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隸、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますのである。

\*\*\*\*\*

### 【 アリルイヤ 諸祖の 第4調 】

司祭) なんぢ へいあん  
爾に平安、

誦經) なんぢ しん  
爾の神にも、

司祭) えいち  
睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) しさい うち およ  
司祭の中にモイセイ及びアロンあり、彼の名を呼ぶ者の中にサムイルあり、

アリル イ ャ 、 アリル イ ャ 、  
ア リル イ ャ 。

誦經) 彼等主に呼びしに、主之に聽けり、

アリル イ ャ 、 アリル イ ャ 、  
ア リル イ ャ 。

司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

めひら なんち ふくいん おしえ さと たま わうち なんち ふく いましめ  
の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんち よろこ  
を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ  
ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

なんち わたましい からだ こうしょう われらなんち なんち むげん ちち しせいしぜん  
よ、爾は我が靈と體との光耀なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善

いのち ほどこ なんち しん こうえい けん いま いつ よよ  
にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン  
福音 經 ルカ福音書76端 14章16~24節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、

なんちのしんに も。  
爾 神

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、

しゆよ、こうえいはなんちにき歸し、こうえい  
主光榮爾  
はなんちにき歸す。

司祭) つしき 謹みて聽くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或人 大なる晩餐を設けて、多くの  
 もの まね 者を招きたり。晩餐の時に及び、其僕を遣して、招かれたる者に謂えり、來れ、蓋  
 いつさいすで そな かれらみなおな じ だいいち ものい われでんち か ゆ  
 一切 已に備われり。彼等皆 同じく辭したり。第一の者曰えり、我田地を買いたり、往き  
 これ み よう こ わ じ ゆる た ものい われうしいつつがい か これ  
 て之を見んことを要す、請う、我が辭するを允せ。他の者曰えり我牛五 羹を買いたり、是  
 こころ ため ゆ こ わ じ ゆる またた ものい われつま めと こ ゆえ  
 を試みん爲に往く、請う、我が辭するを允せ。又他の者曰えり、我妻を娶りたり、是の故  
 きた あた そのぼくかえ これ しゅ つ かしゅいか そのぼく い すみやか  
 に來る能わず。其僕歸りて、之を主に告げたれば、家主怒りて、其僕に謂えり、速  
 まち ちまた こうぢ い まづしきもの かたわ あしなえ めしい ここ ひ きた ぼくい  
 に邑の 衛と巷とに出でて、貧乏、廢疾、跛者、瞽者を此に引き來れ。僕曰えり、  
 しゅ なんぢ めい ごと おこな なおあま ざ しゅ ぼく い みちおよ まがき  
 主よ、爾の命ぜし如く行いたれども、尚餘れる座あり。主は僕に謂えり、道路及び藩籬  
 あいだ い い せつとく わ いえ み けだしわれなんぢら つ か まね  
 の間に出でて、入らんことを説得して、我が家に盈たしめよ。蓋我爾等に語ぐ、彼の招  
 かれたる人は、一も我が晩餐を嘗めざらん。蓋召されたる者は多けれども、選ばれたる  
 もの すくな 者は少し。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そこでイエスが言われた、「ある人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた。晩餐の時刻になったので、招いておいた人たちのもとに僕を送って、『さあ、おいでください。もう準備ができましたから』と言わせた。ところが、みんな一様に断りはじめた。最初の人は、『わたしは土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしください』と言った。ほかの人は、『わたしは五対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしください』、もうひとりの人は、『わたしは妻をめとりましたので、参ることができません』と言った。僕は帰ってきて、以上の事を主人に報告した。すると家の主人はおこって僕に言った、『いますぐに、町の大通りや小道へ行って、貧乏人、不具者、盲人、足なえなどを、ここへ連れてきなさい』。僕は言った、『ご主人様、仰せのとおりにいたしましたが、まだ席がございます』。主人が僕に言った、『道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい。あなたがたに言って置くが、招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう』。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにき歸し、こうえい  
 主 光 榮 爾  
 はなんぢにき歸す。

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ